

令和 5 年 2 月 2 4 日	病害虫発生予報 3 月号	茨城県病害虫防除所
---------------------	-------------------------------	-----------

農薬は、専用の保管庫に鍵をかけて適切に管理しましょう。


＜ 目 次 ＞

I. 今月の予報	
【注意すべき病害虫】	
イチゴ：コナジラミ類、アザミウマ類、アブラムシ類・・・・・・・・・・	1
【防除所レポート】	
シロイチモジヨトウにおける主要薬剤の殺虫効果について・・・・・・・・	3
○サツマイモ基腐病の防除対策（育苗期～植付期）・・・・・・・・・・	5
【その他の病害虫】	
イチゴ、促成ピーマン、促成トマト、促成キュウリ、春ハクサイ、春レタス・・・・・・・・	6
II. 今月の気象予報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
7	

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの
「農薬登録情報提供システム」(<https://pesticide.maff.go.jp/>) で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。
茨城県病害虫防除所 Tel : 0299-45-8200
ホームページでは病害虫・農薬関連情報をご覧いただけます。

<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/>



I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. コナジラミ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 2月下旬現在、寄生葉率（本年値 1.1%、平年値 0.1%）、発生地点率（本年値 30%、平年値 5%）ともに平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると、防除が困難となるほか、葉や果実にすす症状を生じるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。
- ③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

2. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 2月下旬現在、寄生花率（本年値 1.2%、過去 6 年平均値 0.4%）、発生地点率（本年値 30%、過去 6 年平均値 7%）ともに平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① アザミウマ類は増殖が速いので、花をよく観察し、発生の少ないうちに防除を徹底する。気温の上昇に伴い、密度が急激に増加するため注意する。
- ② 薬剤散布は、十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。
- ③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

(イチゴ 続き)

3. アブラムシ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 2月下旬現在、寄生葉率（本年値 1.1%、平年値 0.7%）、発生地点率（本年値 40%、平年値 19%）ともに平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① アブラムシ類は増殖が速く、多発すると葉や果実にすす症状を生じるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。
- ③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

シロイチモジヨトウにおける主要薬剤の殺虫効果について

シロイチモジヨトウ（写真1、2）はネギ、キャベツ、ハクサイ、レタス等の野菜類や豆類、花き類も加害する広食性の害虫である。ネギでは、葉身部の中央から先端部に数十粒の卵塊で産卵され、孵化した幼虫が集団で葉身内に食入し、中から表皮を残して葉肉を食害する（写真3）。

近年、ネギを中心とした野菜類において、シロイチモジヨトウによる被害が増加して、問題となっており、令和2年度に薬剤感受性試験を行ったところである。令和4年度のフェロモントラップへの雄成虫誘殺数は平年値を上回り、令和4年を含む過去11年中1位となった（図）。依然としてシロイチモジヨトウの発生および被害が多いことから、今後の防除対策の参考とするため、13種類の薬剤（表）について感受性検定を行った。



写真1 中齢幼虫



写真2 老齢幼虫



写真3 ネギ葉の被害

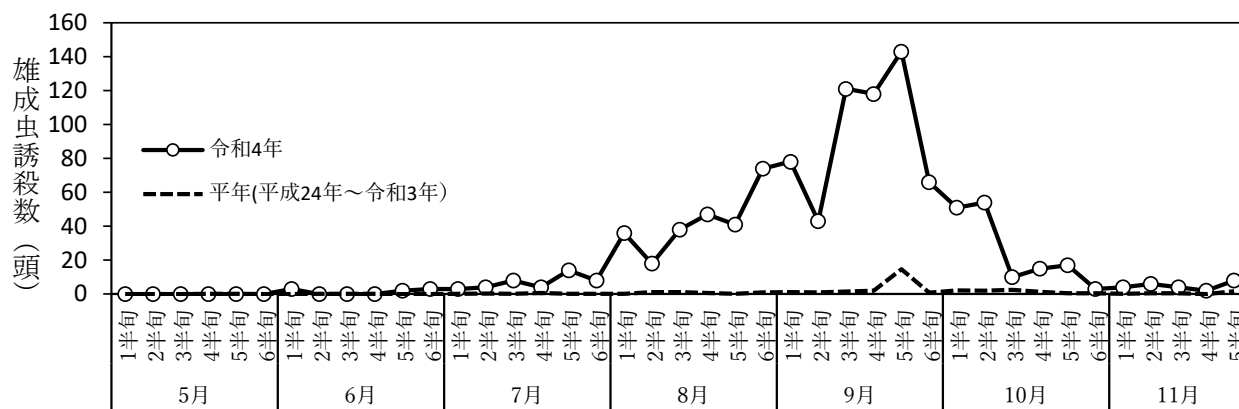


図 フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの発消長（つくば市）

【薬剤検定の方法】

令和4年7～8月に、県内3地点（県南地域A地点（採集作物：大豆）、B地点（同ネギ）、県西地域C地点（同大豆））からシロイチモジヨトウ幼虫を採集し、累代飼育した。所定濃度に希釈した葉液にキャベツ葉片を浸漬し、風乾後に餌として3齢幼虫に与えた。処理1、3、7日後の生死虫数を調査し、補正死亡率を算出して薬剤の殺虫効果を判定した（表、処理1、3日後のデータは省略）。あわせて、食害程度についても調査した（データ省略）。

【殺虫効果および食害程度の結果について】

- ① ディアナ SC、アニキ乳剤、グレーシア乳剤、ブロフレア SC は、いずれの採集地点においても殺虫効果が高かった（表）。これら4剤は、処理1日後から高い殺虫効果を示し、食害程度も小さかった。
- ② トレボン乳剤、トルネードエース DF、ベネビア OD は、いずれの採集地点においても殺虫効果が認められた（表）。食害程度は処理3日後まではやや増加するが、以降は抑えられた。

- ③ ヨーバルフロアブル、プレオフロアブルは、採集地点によって殺虫効果に差が認められた(表)。殺虫効果の認められた地点では、食害程度が抑えられている傾向が見られた。
- ④ ゼンターリ顆粒水和剤は採集地点によって殺虫効果に差が認められた(表)。食害程度は処理日数の経過に伴い、増加する傾向が見られた。
- ⑤ カスケード乳剤、アクセルフロアブル、参考として行ったプレバソソフロアブル5は、いずれの採集地点においても殺虫効果がやや低い～低く(表)、食害程度も大きかった。なお、プレバソソフロアブル5はネギでは2,000倍で登録があるが、参考として大豆のハスモンヨトウに登録のある4,000倍で試験を行った。

表 シロイチモジヨトウに対する主要薬剤の殺虫効果

IRAC コード	供試薬剤名 ¹⁾ (有効成分名)	希釈 倍率	県南地域		県西地域
			A地点	B地点	C地点
3A	トレボン乳剤 (エトフェンプロックス)	1,000	○ ³⁾	◎	◎
5	ディアナSC (スピネトラム)	2,500	◎	◎	◎
6	アニキ乳剤 (レピメクチン)	2,000	◎	◎	◎
11A	ゼンターリ顆粒水和剤 (BT (アイザワイ生菌))	1,000	○	△	△
15	カスケード乳剤 (フルフェノクスロン)	4,000	×	△	×
22A	トルネードエースDF (インドキサカルブ)	2,000	○	◎	◎
22B	アクセルフロアブル (メタフルミゾン)	1,000	×	×	×
	プレバソソフロアブル5 (クロラントラニリプロール) (4,000) ²⁾		×	×	×
28	ベネビアOD (シアントラニリプロール)	2,000	◎	○	○
	ヨーバルフロアブル (テトラニリプロール)	5,000	○	◎	△
30	グレーシア乳剤 (フルキサメタミド)	2,000	◎	◎	◎
	プロフレアSC (プロフラニリド)	2,000	◎	◎	◎
UN	プレオフロアブル (ピリダリル)	1,000	◎	×	△

1) 令和5年2月1日現在、いずれかの野菜類で本種に登録のある薬剤から選定した。

2) プレバソソフロアブル5はネギでは2,000倍で本種に登録があるが、参考として、大豆のハスモンヨトウに登録のある4,000倍で試験を行った。

3) 殺虫効果の判定は、次のように行った。◎ (高い) : 補正死虫率90%以上、○ (認められる) : 70~90%未滿、△ (認められるがやや低い) : 50~70%未滿、× (低い) : 50%未滿 (日本植物防疫協会 調査法 (野菜・花き【虫害】) の判定基準を引用)

【注意】 作物によって、登録のある薬剤が異なるので、使用にあたってはラベルをよく読んで、登録内容を確認しましょう！

【今後の防除について】

令和4年度は、茨城県以外に埼玉県や群馬県でも注意報や多発生の予察情報が発表されるなど、シロイチモジヨトウの発生が多かった。近年、多発生の傾向が続いていることから、次年度も注意すべき害虫である。

今回の検定結果より、シロイチモジヨトウ3齢幼虫に対する防除効果の高い薬剤は、令和2年度に実施した検定結果とおおむね同様の傾向を示した。シロイチモジヨトウを防除する際は、集団で生息する若齢幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除することが重要である。中齢以降になると薬剤の効果が低くなるだけでなく、作物内に食入し薬剤が届きにくくなるので注意が必要である。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤を用いてローテーション散布を行うようにする。

県内におけるシロイチモジヨトウの被害は、ネギの他、キャベツ、ハクサイ、レタス、ショウガ、大豆、ピーマンでも認められている。本種以外のハスモンヨトウ、オオタバコガ、コナガ等のチョウ目害虫に対する殺虫効果は、本種に対する効果とは異なる可能性があるため、防除の際は、圃場での発生種および効果を確認する。

サツマイモ基腐病の防除対策（育苗期～植付期）

サツマイモが本病に感染・発病すると、栽培中に地上部の茎葉が枯死し、地下部の塊根（イモ）は腐敗していきます。また、周囲の健全な株にも病原菌が伝染するため、本病が圃場内にまん延し、大きな減収を招きます。

育苗期から生育期、収穫期から貯蔵期まで、年間を通して発生するおそれがあるので、本病の侵入防止と早期発見に努めましょう。

【病気の特徴】

糸状菌（カビ）により引き起こされ、保菌した苗・イモ・残さ（畑に残った葉や茎、イモ）等が伝染源となる。苗床では葉巻や株の萎縮、葉の変色、苗基部の黒変等の症状が発生する。見かけ上は健全な苗やイモでも保菌している可能性があり、注意が必要である。

【防除対策】

<育苗にあたっての注意>

- ・苗の増殖は、ウイルスフリー苗を用いる。
- ・来歴が不明な種イモや切苗は絶対に使用しない。
- ・多発地域からは、種イモや切苗を持ち込まない。
- ・生産者間で種イモや切苗の譲渡等は行わない。

<作業にあたっての注意>

- ・発生地域と行き来のあったコンテナ等は、洗浄、消毒してから使用し、残さや土を圃場に持ち込まない。
- ・作業する圃場ごとに、農機具や長靴等についた土は良く落とし、水で良く洗浄する。

<健全苗を確保するために>

【苗床・育苗準備時の対応】

- ・種イモから苗を増殖する場合は、病害等が発生していない圃場で生産されたイモを選別して用いる。伏せ込む前の種イモは消毒を行う。
- ・育苗終了後は、苗床の残さを育苗ハウスから持ち出して適切に処分する。苗床は、耕うんして残さの分解を促したのち、梅雨明け後の高温期に太陽熱土壌消毒を行う。

【採苗時の対応】

- ・採苗時のハサミはこまめに消毒を行う。苗は地際から5 cm以上の位置で切る。
- ・採苗した苗は、採苗後速やかに苗消毒を行う。
- ・苗消毒用の薬液は、使用当日に調製し、登録の内容に従って浸漬処理を行う。

【購入苗への対応】

- ・切苗を購入する時は、基腐病対策が徹底されていることを販売店に確認し、未消毒の場合は購入後に必ず苗消毒を行う。

<侵入に備えた対策>

- ・排水の悪い圃場は、本病が侵入した際に発病しやすい傾向があるため、明きょ設置や耕盤破碎、枕畝の途中に排水溝を設置するなど、排水対策を徹底する。
- ・圃場ごとに植え付けた苗の苗床の場所や採苗日、ウイルスフリー苗などの購入先を記録する。

※本病が疑われる症状を見つけた場合は、抜き取り等は行わず、速やかに各地域の農業改良普及センターまでご連絡ください。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況および注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並	2月下旬現在、平年並の発生である。
	ハダニ類		
促成ピーマン	斑点病	発生量：平年並	2月下旬現在、平年並の発生である。
	うどんこ病	発生量：やや少ない	2月下旬現在、平年よりやや少ない発生である。
	アザミウマ類	発生量：平年並 ～やや多い	2月下旬現在、平年並～やや多い発生である。
	黄化えそ病	発生量：—	2月下旬現在、一部圃場で発生を認めている。発病株は直ちに抜き取り、適切に処分する。媒介虫であるアザミウマ類の防除を徹底する。
トマト 促成	灰色かび病	発生量：やや少ない	2月下旬現在、平年よりやや少ない発生である。
促成キュウリ	退緑黄化病	発生量：やや多い	2月下旬現在、平年よりやや多い発生である。発病株は直ちに抜き取り、適切に処分する。媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。
	褐斑病	発生量：平年並	2月下旬現在、平年並の発生である。
	灰色かび病		
	うどんこ病	発生量：平年並 ～やや少ない	2月下旬現在、平年並～やや少ない発生である。
	べと病	発生量：やや少ない ～少ない	2月下旬現在、平年よりやや少ない～少ない発生である。
春ハクサイ	白斑病	発生量：平年並	2月下旬現在、平年並の発生である。
	べと病		
春レタス	腐敗病	発生量：平年並 ～やや多い	2月下旬現在、平年並～やや多い発生である。凍霜害による傷口から病原菌が侵入し、発病する。高温・多湿条件が発生を助長するため、換気を十分に行う。

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 2月25日から3月24日)

気象庁(2月23日 発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	10	30	60
	降水量	関東甲信全域	40	40	20
	日照時間	関東甲信全域	20	40	40

[概要]

期間の前半は、気温がかなり高くなる可能性があります。

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

<1週目の予報> 2月25日(土曜日)から3月3日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

<2週目の予報> 3月4日(土曜日)から3月10日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率60%

<3週目から4週目の予報> 3月11日(土曜日)から3月24日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類(FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。